

「雄々しく強く生きなさい」

～信仰をしっかりと持って立ち上がる～

「目を覚まして、イエスとの関係を握りしめ、根性を持って勇敢になれ！」

コリント人への第一の手紙16章13節〔アライプ訳〕

スケート、大相撲、テニス、高校野球、イチロー選手の引退…。スポーツ界では、絶え間なく挑戦するアスリートたちの勇姿を見ます。本当に必死で、一心不乱、果敢に挑戦する姿には心底感動させられます。私たちの信仰もかくありたいと思わせられます。

しかし、私たちの信仰もアスリートたちと同じように、いつも順風満帆というわけではありません。山あり谷ありです。また時には谷あり谷ありの連続だったりします。しかし、その谷を通過している時こそ重要であり、必要な時であると思います。順調であるときは、神様など忘れてしまい、すぐに調子に乗って、高慢になってしまうものです。ですが、どうしようもなく、落ち込み“もうだめだ！おしまいだ！”と思うようなときこそ、主に近づく時であり、主が近くにいて下さる時ではないでしょうか。だから、試練や苦しみに遭って、思うように前に進むことができないときこそ、主の恵みを信じ、感謝すべきであり、賛美すべきであると思うのです。

「苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました。(詩篇119篇71節)」と詩篇の記者は記しています。しかし、そこまで来るまでに相当の信仰の戦いを通過してきたと考えられます。「わたしの心の悩みをゆるめ、わたしを苦しみから引き出してください。(詩篇25篇17節)」や、「わたしのいのちは悲しみによって消えゆき、わたしの年は嘆きによって消えさり、わたしの力は苦しみにによって尽き、わたしの骨は枯れはてました。(詩篇31篇10節)」、「わたしの心はわがうちにもだえ苦しみ、死の恐れがわたしの上に落ちました。(詩篇55篇4節)」など詩篇には幾つも「苦しみ」に関する体験的な詩が表現されています。

誰もが「苦しみ」や「試練」に遭うことは逃げたいと願うものです。しかし、事実私たちはそんな苦しい現実を通過します。だからこそ、私たちは神様の御手を体験することができ、自らの無力さを実感し、神様の偉大さを知るのです。

わたしが牧師として、伝道者として生きることを決心した最も大きな理由は、「どんな人生、どんな職業についたとしても、苦労はつきものだし、それから逃げることは決してできない。そうであるなら、最もやりがいのある、永遠に尽きることのない使命に満ちた仕事をさせていただく！」と決心したからです。「主の業に励む」ということ以上に価値のある生き方はないと感じたからです。そのやりがいを感じるためには、主にできるだけ近く生きることだと感じています。自分の人生は自分のものではなく、主と共に歩む人生です。祈りの生活です。しかも、教会として共に祈る生活です。祈禱会にもご出席し、共に祈り合いましょ！